５　次の文章は、『琴後集』の執筆経緯について書かれたものの一節である。これを読んで後の問いに答えよ。　　　　　〈愛知教育大〉二〇一八年度出題

　そもそも人のしるしおきけるふみなどを、そのきずをもとめ出でてそしりおとしめ、わがさかしさを人にほこらむとかまふることは、世のえせものの癖にて、そは人の名高きがねたさに、あながちにまけじとするわざなれば、ひごとの多かるならひにて、①人をあばきいはむとて、かへりて②わが名をくたすたぐひもおほかるめり。今おのがものし侍ることは、さるえせもののまねするやうなるわざに侍れど、これには深く思ふところなむ侍りける。がたゐの翁が教へをうけて、その学びの心を③つぎたる人これかれ侍れど、言の学びにくはしきことは、の屋のあるじこそ一人すぐれにたれ。翁の思ひ残されしふしをも、考えあきらめたるたぐひ多くて、この人出でて後、この学びの道そなはりぬるは、いみじきさをにて、まことに④藍よりも青しとせむこと、⑤いへばさらなり。かくて今は世に名高くて、たふとみしたがふ人も多かるは、いとよろこばしきことなるを、ただそののあげつらひは、いたくひが心得のみ侍るこそをしけれ。さるは⑥なほなほしききはの人なりなましかば、⑦さてもありぬべきを、しかすぐれたる人のひがごといはむは、人のまどふべきわざにて、かつはあがたゐの歌の教へも、この人によりてつひに⑧かくれぬべければ、今そのひがごとを改めことわりて学びの人などの、あらぬかたにふみまよはざらむ道しるべにもと思ひとり侍れば、おのがまだしう愚かなるをも忘れて、なすわざになむ侍りける。

（村田春海『琴後集』による）

注１　しひごと――事実を曲げて言うこと。でたらめ。

注２　あがたゐの翁――賀茂真淵。本居宣長と村田春海はともに賀茂真淵に学んだ。

注３　古言の学び――国学。

注４　鈴の屋のあるじ――本居宣長。

注５　いさを――功績。

注６　歌のあげつらひ――歌についての議論。

注７　初学び――学問の道に入ってまだ長く経っていない人。

問１　傍線部①に「人をあばきいはむ」とあるが、何を「あばく」のか。それにあたる語として最も適切なものを、傍線部①より前の範囲から一語、後ろの範囲から一語、それぞれ抜き出して答えよ。

問２　傍線部②・③・⑤・⑥を現代語訳せよ。

問３

⑴　傍線部④の「藍よりも青し」と同義の言葉となるよう、次の空欄にあてはまる語を記せ。ただし、漢字で書けるところがある場合は漢字で書くこと。

「［　　　　　　　］ の誉れ」

⑵　傍線部④は、どのような状況についてなぞらえたものか。人物関係が分かるように、三十字以内で説明せよ。

問４　傍線部⑦について、次の問いに答えよ。

　　⑴　「さてもありぬべき」を現代語訳せよ。

⑵　何に関して「さてもありぬべき」と言っているのか。本文に即して説明せよ。

問５　傍線部⑧を例にならって文法的に説明せよ。

例　まけ（カ行下二段・動詞・未然形）　じ（打消意志・助動詞・終止形）　と（格助詞）

◎問６　村田春海が『琴後集』を著した動機は何であるか。五十字以内で説明せよ。

問７　『源氏物語玉の小櫛』などで本居宣長が提唱した平安文学を代表する美的理念は何か。五字前後の語句で答よ。

【解答と採点基準】

問１　前＝きず　　後ろ＝ひがごと

問２　②＝自分の名声をおとしめる例

　　　③＝継いでいる人はこの人あの人とたくさんいますが

　　　⑤＝今さら言うまでもない

　　　⑥＝普通の分際の人

問３　⑴＝出藍

　　　⑵＝本居宣長が、師の賀茂真淵よりも国学の領域で優れている状況。（29字）

「宣長が師の真淵よりも優れている」という骨格の要素が一点でも欠けているものは０。「国学」に触れていないものは減点３。

問４　⑴＝そのように考え違いがあってもしかたがない

指示語が具体化されていない場合は減点５。

　　　⑵＝Ａ宣長ほどの学識のない、Ｂ平凡な才能の人は歌について考え違いが多いこと（に関して、しかたがないと言っている）。

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝３

Ｂ＝７〔「凡人が間違うこと」という骨格がなければ０。宣長との対比のないものは減点３。「歌」への言及のないものは減点２。〕

問５　かくれ（ラ行下二段・動詞・連用形）　ぬ（強意・助動詞・終止形）

　　　べけれ（推量・助動詞・已然形）　ば（接続助詞）

問６　Ａ宣長の歌の議論は誤りが多く、Ｂ師真淵の教えが途絶えそうなので、  
Ｃ初学者を迷わせないように指針とするため。（50字）

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４

問７　もののあはれ（６字）

【現代語訳】

　いったい他人が書き残した書物などを、その欠点を探し出して非難し見下し、自分の賢さを人に自慢しようとたくらむことは、世間のえせ学者の習癖であって、それは他人が有名なのがねたましいために、むりに（その人に）負けまいと（思って）する行為なので、（そういう人の説に）でたらめが多いのはよくあることであって、人（の欠点）をあばいて論じようとして、かえって問２②自分の名声をおとしめる例も多いようだ。いま私が書きますことは、そのようなえせ学者のまねをするような行為ですが、これには深く思うところがあるのですよ。賀茂真淵先生の教えをうけて、その学問の精神を問２③継いでいる人はこの人あの人と（たくさん）いますが、国学に精通しているという点では、本居宣長氏がただ一人すぐれている。真淵先生の考究し残しなさった点をも、考えて明らかにした類のことが多くて、この人が（世に）出てから後、この国学の道が大成されたことは、たいそうりっぱな功績で、（宣長氏に）本当に出藍の誉れがあるということは、問２⑤今さら言うまでもない。こうして（宣長氏は）今は世間に名声も高くて、（その学風を）尊び（その説に）従う人も多いことは、たいそう喜ばしいことであるが、ただ宣長氏の歌についての議論は、ひどく考え違いばかりがありますのは実に惜しいことだ。それも問２⑥普通の分際の人であったならば、問４⑴そのように考え違いがあってもしかたがないが、そのように優れた人物が間違いを言うとしたら、人々が迷うに違いないことであって、かつまた真淵先生の歌の教えも、この宣長氏によって最終的にはきっと埋もれてしまいそうなので、いまその誤りを改め筋道を立てて述べ、初学者などが、とんでもない方向に（道を）踏み迷わない（ための）道案内にも（しよう）と決心していますので、自分自身が未熟で愚鈍であることをも忘れて、（これを）書くわけでありますよ。